

展望と主張:エスニック政策

—平等・自治・反差別

台湾は様々なエスニックグループによって成り立つ一つの「入植社会 (settlers' society)」であり、非伝統的な「移民国家 (immigrant country)」である。こうした区別は、台湾がその歴史の中で「原住民族 (indigenous peoples)」の地位を承認していることによるもので、単に移民が次々とやってくる中で、比較的早く、或いは最も早くにやってきたグループが集まっているというものではない。この点についていえば、原住民は先住民族の権利 (indigenous rights) を具えている。客家人や福佬人 (閩南人/鶴佬人) は早い時期に台湾を開墾した開拓者の後世であり、主観的には概ねすでに台湾を故郷、或いは母国とみなしており、こうした人々は本土人 (natives) と呼んでよいだろう。

国民党とともに台湾にやって来て長期的な中華民国体制を築いた「外省人」は、故郷を離れ、郷に入れば郷に従えというプロセスの中で、比較的曲折した心情を経験してきたであろう。歴史的な構造もあって、望むか望まないかにかかわらず、少数民族 (ethnic minority) と呼ばれる人々には、依然として主観的、客観的な差別的な見方がある。同時に、一般的に「外国人配偶者」と呼ばれる人々も、「結婚移民 (marriage migrant)」であり、彼等は往々にして急いで社会に溶け込もうとするが、出身地も様々なため、お互いにある程度のエスニック意識ができあがっているかどうか、この点については引き続き注視していく必要がある。この他、声をひそめ姿をくらましたと思われていた平埔族は、ここ数年、政府に対して戦後剥奪された原住民族の身分回復を求めている。しかし、人権からしても社会福祉からしても、少なくともすでに単なる内政部の国勢調査における分類の問題ではなく、台湾は一つの民主主義国家として、公共政策問題を重視しなければならない。

本シンクタンクのエスニック政策にかかる具体的主張は次の通りである。原住民族に関しては、統治者が原住民族の声を軽視してきたため、原住民に自身が選択した国家ではないと認識させる状況となっている。よって、原住民族法、人権法及び関連法規による保障を通して、原住民が気持ちよくこの国で共に生活できるようにすべきである。客家人については、客家人の集団アイデンティティを確保するため、文物保存、文化啓発、言語普及を進めるほか、現代の客家人アイデンティティはお互いの共通の記憶と経験の上に成り立っており、客家の歴史の再建は一刻の猶予も許さないものであることを考慮し、政府は客家人に自己アイデンティティ選択の機会を与えるべきである。外省人の中にも過去の出身省籍による差別を嫌う者もいるが、客家人には人口減少の懸念もあるため、政府は省籍にかかる国税調査によって客家人の人口を確認し、少なくとも適切な人口比に応じた客家文化・教育への支出を行うべきである。外省人については、全ての外省人が「行き場がない」と感じないよう、外省人のアイデンティティはかなり尊重されており、彼等は政治的権力や公平な経済資源の分配を追求している。この他、原住民族の権利の保障に関しては、相

当程度は歴史補償の側面があり、土地剥奪や文化的支配などの歴史的事実からすれば、平埔族が最大の被害者であるといえる。

我々のエスニック政策の展望は次のとおりである。「原住民自治法」を可決し、土地・財産および権力を具えた原住民族による自治を着実なものとする。「言語平等法」を可決し、あらゆる台湾本土の言語を国家の言語とする。「反差別法」を可決し、全ての人が公平な待遇を受けられるようにする。外国人配偶者の基本的人権を保障し、特に元々の国籍の文化を尊重する。平埔族の原住民族の身分を回復し、原住民族と漢人の歴史的恩讐の和解を図る。